

横浜国立大学名誉教授

みや わき あきら

宮脇 昭



「ふじのくに」から
発信する

ふるさとの

森づくり

国内外1700か所以上、400万本の植樹を
行ってきた宮脇昭氏と川勝平太静岡県知事が、
これからの森づくりについて語り合った。

静岡県知事

かわ かつ へい た

川勝平太



「鎮守の森」の知恵に学ぶ

知事 第五回(2014年)の「KYOTO地球環境の殿堂」入りを果たされ、おめでとうございます。

宮脇氏 どうもありがとうございます。

知事 この国際賞は、地球環境の保全に多大な貢献をされた方を顕彰するもので、先生の受賞はシンボリックです。「宮脇方式」として知られる森づくりは「鎮守の森」の知恵に学ばれたものですね。「鎮守の森」は日本独自の文化資産なので、先生の殿堂入りは「鎮守の森」が地球環境保全のモデルになるという証しでもある。

宮脇氏 「鎮守の森」こそ、日本人の文化であり、心であり、そして未来につながるのちの森づくりの、一番の基本です。「鎮守の森」の木は、2011年の東日本大震災にも、1995年の阪神・淡路大震災にも、そして2013年の伊豆大島の土砂災害にも耐えて、みんな残っているんです。

知事 大災害からくみ取るべき教訓の一つは「鎮守の森」を見直し、日本の伝統文化に学ぶことです。先生は「鎮守の森」の重要性にいち早く気付かれ、全国に広げる運動をされてきました。まさに「鎮守の森」の代名詞のような存在です。

宮脇氏 静岡県では、私を中心になっ

朝から晩まで土を掘ったりするんです。机の前での勉強はないから、不安になりましたが、チュクセン教授は「見る、この大地を。46億年の地球の歴史、40億年の生命の歴史、500万年の人類の歴史、本物の命のドラマを展開しているじゃないか。おまえは自分の身体を測る器械」にして、現場で目で見、手で触れ、においを嗅ぎ調べろ」と言われました。

知事 科学は分野を問わず、現場がテキストです。先生のご専門の植物学は、植物自体がテキストですね。植物は土壌抜きではありえないので、土壌もまたテキストです。ご自身の手足を使って調べた生のデータの分析なので、おのずから独創的な研究になったのでしょうか。

宮脇氏 さらにチュクセン教授は「大事なことは、その土地が、どのような生物的な生産能力を持っているか」と言われました。これは「潜在自然植生(potential natural vegetation)」という概念です。

それまでは、生物集団を見ると、人間の影響が加えられる以前のオリジナルな植生である「原植生」(original vegetation)と、今、目に見える「現存植生」

て、1985年ごろから現地植生調査を始め、「静岡県の潜在自然植生―緑豊かな環境創造の基礎的研究」をまとめています。ですから、既に十分なデータがあつて、「緑の戸籍簿」はもうできているんです。このデータをもとに、森づくりをどうやるかが、今後の課題です。

知事 四半世紀以上も前に、当時の山本敬三郎知事の依頼で、先生には静岡県県の「潜在自然植生」を調査していただき、立派な成果も出ていることに、私は最近になって気づき、一驚しました。

宮脇氏 どこにどういう木を植えたらいいか、主木は何であるか、全部押さえてあるんです。私は日本全国の現地植生調査をして「日本植生誌」全十巻(至文堂)をまとめましたが、静岡県については特にそういう御縁があるわけです。

知事 長く中断しましたが、これから調査の成果を生かします。東日本大震災を契機に、すでに掛川市、富士市、沼津市など沿岸部で宮脇方式の森づくりが始まっています。

現場がテキスト

宮脇氏 私の研究は、戦後ほどなく、ドイツ国立植生図研究所のチュクセン教授の下に留学したことが大きな転機となりました。到着すると、次の日から現場の調査に連れ出されました。

(actual vegetation)の二つがありました。

それに対して、チュクセン教授は、第三の植生概念を発表したのです。「潜在自然植生」とは、もし人間の影響を今すべてストップしたとしたら、その自然環境の総和にどのような自然の緑を支えるポテンシャルがあるかという事です。

知事 目の前の大地がどのような植生を生む可能性があるか、ということですね。

日本の潜在自然植生

宮脇氏 ドイツに留学して二年経ったころ、日本の大学から「帰ってくるように」と国際電報が来ました。どうしようかと思っている時に、故郷の「鎮守の森」を思い出したのです。御前神社という神社があり、境内に入ると、黒々とした大木から、大きな枝が出ている。身震いするような気持ちで仰ぎ見た、その光景を思い出しました。ひよつとして、御前神社のあの大きな木が、私のふるさとの潜在自然植生ではないかと思つたんです。

知事 海外にあつて、突然、ふるさとの樹木が先生の脳裏によみがえった瞬間は、絵になります。ドラマですね。
宮脇氏 帰国については、チュクセン

教授に反対されていたのですが、結局、大学に連絡して、二三年以内にもう一度必ず渡来させる」という証書をチュクセン教授に入れてもらって、日本に帰りました。

帰国して、すぐ現地植生調査に行きました。中国地方の、私のふるさとは、ほとんどがスギやヒノキの植林ですが、鳥居のそばの大きなウラジロガシ、アカガシは、まさに潜在自然植生の主木だったので。私は、潜在自然植生の考え方は本物であると確信しましたが、日本では誰にも相手にされませんでした。しかし、多くの学生達の協力を得て、日本全国を徹底的に十年間歩いて現地植生調査をしてまとめたのが、『日本植生誌』全十巻です。

知事 日本列島の植生調査の金字塔です。北は北海道から南は沖縄に至るまで、全十巻、地域ごとに、徹底的に調査して、地域ごとの潜在自然植生を見極められた。

宮脇氏 私たちの調査では、たとえば私の生まれた岡山県、中国地方の潜在自然植生を調べると、条件の良いところはほぼ広葉樹に押さえられていて、スギ、ヒノキ、マツなどの針葉樹は尾根筋などに局地的に自生していたのです。

しかし、様々な人間活動によって本来の常緑広葉樹林はほとんど失われ候や風土で違ってくる。その違いが個性です。各地の鎮守の森も、似ているところと、異なるところがありますね。

宮脇氏 そうです。私は、現場を見なければ何とも言えないんです。

知事 そのとおりですね。先生が『日本植生誌』全十巻をまとめられて以来、後に続く人は、学界はもとより、ひろく地域社会にも輩出しています。各地の潜在自然植生を原点にした森づくりを自覚的に国民運動にしていきたいですね。日本列島は南北に長く、生態系の宝庫ですから、各地固有の潜在自然植生を顕在化させれば、生態系の異なる世界の様々な地域に活用できます。日本独自の鎮守の森という文化資産が世界の環境保全に役立つということですね。

宮脇氏 世界に発信できる、世界モデルになるものです。是非、日本の中心に位置する静岡県で、長さ10キロメートルでもいいですから、実現していただきたいとお願ひします。

知事 静岡県では私が音頭をとって「宮脇方式」で防潮堤整備をやっていると呼びかけています。

宮脇氏 私は2020年のオリンピックがチャンスだと思います。オリンピックに来た人に三本のポット苗に十ドル、十ユーロ、千円出してもらって、

マツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹林が潜在自然植生としての自生域の二百五十倍以上に増えています。人間が増やしているのです。増え過ぎることは、生態学的には最も危険なことです。

知事 マツ、スギ、ヒノキは製材用ですが、潜在自然植生からすると、自然淘汰では主役になれないということでは、森づくりにおいて知っておくべき知識ですね。

宮脇氏 はい。自然災害の少ない立地で、十分管理できて、経済的にも有用な木材生産のために使うところは、今後も針葉樹の植林は可能です。しかし、潜在自然植生の広葉樹林域に外来種や客員樹を植えたなら、しよつちゅう管理しなければなりません。そういうところはすぐにヤブになってしまいます。

東京オリンピックを記念した「いのちの森」として、日本各地に植えてもらったらどうでしょう。

知事 それはいいアイデアですね。是非日本の独自性を出したい。そのためには文化の原点に戻るのが良いのです。日本人は、人間は自然の一部であり、自然との調和を重んじるという哲学を持っています。富士山との向き合い方に見られるように、自然に対して畏敬の念を抱いています。人間が自然から学び、自然を生かし、人間のためにもなるように手を加える。それが文化の根本です。植樹は文化活動です。大地を耕すことで、人の心も耕されます。日本が育んできたそういう文化活動を、東京オリンピックをきっかけに、発信していきたいと思ひます。

知事 マツ林は、防砂・防風には有効ですが、東日本大震災の津波で、陸前高田の7万本の松林が全滅しました。そのとき私は、改めて日本における潜在自然植生とは何かを考える必要にせまられ、「鎮守の森」をモデルとする宮脇方式を再認識したのです。

海岸のマツ林は、防風・防砂としては有用でも、津波には無力ですが、海岸はクロマツでなければならぬという固定観念に縛られている人が多い。

宮脇氏 マツは確かに育てやすい。種はパラシュートで飛んでいきますから、どこでも最初に出てくるんです。植えてなくても出てきます。それはそれでいいんです。生えてくるものはいい、切る必要はない。私はあるものは残すべきだと思ひます。

地域からの情報発信を

知事 植樹活動を学校教育の中に取り入れられる工夫もしたい。

宮脇氏 例えば掛川は、小学校でどんぐりを植えて、どういうふうに大きくなっていくか、観察しているんです。

知事 現場に入り、現場から学ぶ。これこそ本物の学問で、私はそれを「座学」と区別して「実学」と言っています。本だけでは頭でかちになります。

宮脇氏 本は副読本ですよ。現場こそが、本当の教科書です。

知事 英数国理社という主要五科目を中心とした、西洋由来の近代学問を国民に普及させるといふ、明治以来の学制は目的を達し、その柱をなす文部科学省の役割は一段落しました。これ



宮脇 昭氏

横浜国立大学名誉教授
(公財)地球環境戦略研究機関国際生態学センター長

1928年生まれ。理学博士。広島文理科大学生物学科卒。ドイツ国立植生園研究所研究員、横浜国立大学教授、国際生態学会会長等を歴任。紫綬褒章、勲二等瑞宝章、ブループラネット賞(地球環境国際賞)等を受賞。

知事 生えているマツも、生えてくるマツも、わざわざ伐採する必要はないのです。ただ、それを自然植生の主木だと思ふのは間違いであり、本物の主木を見極め、それを中心に森の防潮堤を作る。その中にマツが混じっているも一緒にしておけばよい。

宮脇氏 何が主木であるかを見極めることが大事なのです。

土地本来の潜在自然植生の主木を選んで、それを中心に森づくりをやりましょう。

潜在自然植生を国民運動に

知事 潜在自然植生を顕在化させる方法は、人間の潜在能力を伸ばすのと同じですね。集団の中でもまれ、競争と我慢をしながら、互いの実力を知り、認め合って仲良くなり、それぞれの能力が伸びることが良いのです。

宮脇氏 すべてそうですね。無いものねだりは無理ですけれど、土地の能力、地域の能力、人の能力、社会の能力、政治力を引き出して、未来のために、今できることをやっていたらいいと思います。

知事 植物にせよ人間にせよ、潜在力を引き出すのが良いという哲学ですね。その原理は同じでも、具体相は様々です。植生だけでも、地形や気

からは、農林水産業を含む現場から学ぶことが大切です。自らが生きていく地域を良くするには、まず生活の現場を知らねばなりません。大地やそこに根付いている文化を学ぶことから始めなければなりません。

宮脇氏 自然は、場所によって違うわけですから、地域の問題になるわけですね。

知事 現場を知る学問は地域学です。地域学は「場の力」を引き出す基礎作業です。現場の潜在力を引き出すというのには「潜在自然植生」を顕在化させるのと同じ趣旨です。学ぶべきテキストは地域にある。静岡県が先頭に立つて、そのような地域学の隆盛する学問の都になるのが理想です。

宮脇氏 静岡から、世界に発信するといふわけですね。

知事 地域が東京から自立していくためには、日本の各地で、「鎮守の森づくり」のような「場の力」を引き出す運動が沸き起ることが求められます。ポスト東京時代は、シンボリックには「鎮守の森の都づくり」から始まるでしょう。

宮脇氏 すばらしい考えです。本当に

今日はいい勉強になりました。
知事 こちらこそ、ありがとうございます。